令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	滋賀県立能登川高等学校

人権課題	子供、インターネットによる人権侵害	対象学年・取り扱った教科等	①１学年・LHR ②全学年・LHR	時数等	①１　②７

目標・人権教育のねらい	①日常の高校生活における言葉や行為等で人権を侵害していることがないか、身近な人間関係について見つめなおす。 また、高度情報化社会の中で、インターネットや携帯電話を用いる際の注意点を知り、自他ともに大切にできるコミュニケーションスキルを身につけ、友人との正しい付き合い方を学び、充実した高校生活を目指す。 ②映画鑑賞とその後のグループ討議で、人権問題（コミュニケーションとSNS）について理解を深める。
実施した内容	①事前アンケートで、インターネットと自身の関係について認識し、LHRでインターネットにまつわる代表的な問題についてワークシートを用いて各自で考え、グループ討議で経験談を話し合い、画用紙にまとめ、図書館に掲示した。 ②隣人とのコミュニケーション不足からSNSがらみの問題に発展した映画「ミセス・ノイズィ」を鑑賞し、事後にグループ討議とアンケート調査を実施した。
工夫した点	（指導上の工夫） ①事前のアンケートで、日常のインターネットとの関わりを調査し、問題意識を高めた。 ②・近年増加し続けるSNSトラブルに関する作品を選択した。 ・グループ討議を行い、トラブルの経験は自分だけではないと気づくことができるよう配慮した。 ・事後アンケートで、実際のSNSトラブルの経験の有無を調査した。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	現代の国語、論理国語、日本史探究、世界史探究、地理総合、政治経済、 英語コミュニケーションⅡ、英語コミュニケーションⅢ、家庭基礎、保育基礎、情報Ⅰ

事業成果

知識的側面

①グループでの意見の共有によって、自分の知らなかったトラブル事例を知ることができた。

②「インターネットは誰彼かまわず炎上する対象である、ということが非常によくわかった」などの感想が見られた。

価値的・態度的側面

①事前アンケートでは、インターネット利用が「平日１～３時間」５６％、「休日３～５時間」４４％と約半数を占め、「ゲーム等で知り合った人と実際に会ったことがある」１０％、「（スマホやゲーム等で）トラブルや困った経験がある」１０％であり、多くの時間を費やしていることや、危険と隣り合わせにあることを自覚できた。

②「（SNSに）安易に感想を書いたりしない。」「これからの人生を自分の庭だけで過ごすのではなく、広い景色を見て生きていきたい」「簡単に人を死へと追いやることができてしまうので、考えて行動に移したい」などの感想が見られた。

技能的側面

①②「別の視点があるかもしれない、と考えるようにしたい」「相手の行動の理由も考えていけるとよりよい人生が送れると思う」など、今後の人間関係における解決策の一つを身につけた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	滋賀県立能登川高等学校

人権課題	女性、性的指向、性自認	対象学年・取り扱った教科等	１学年・LHR・保健・家庭	時数等	６

目標・人権教育のねらい	・性に関する正しい知識や自他の性に対する認識を深める。 ・望ましい人間関係を築いていくことができる能力や態度を養う。
実施した内容	１年LHRで、「いのちの安全教育～プレコンセプションケアを含むお話～」にて「性暴力・デートDV」「性的画像の投稿」等、最新情報を含む講演を聞き、感想の一部を保健だよりに掲載した。保健では、副教材「高校生が知っておきたい性と健康のこと」、漫画「１０代のための性の世界の歩き方」を活用して授業を行い、家庭では、「自分らしく生きる」をテーマに自分の性や男女の在り方について考えさせた。
工夫した点	（指導上の工夫） ・自撮りの被害件数、性感染症の総数、１０代の中絶件数など具体的な数値をあげてもらった。（LHR） ・事後アンケートを実施し、振り返りによる定着をはかった。（LHR） ・アンケート結果を保健だよりに項目別に掲載した。（LHR） ・１０代の性について、イラストが豊富で文字情報が整理された漫画などの副教材を活用した。（保健） ・性意識について、LGBTQIAを取り上げ、性的指向や性自認に踏み込んだ内容となるよう意識した。（保健） ・男女の性の在り方について、自分にとっての「ふつう」とは何かを考えさせ、同時に日本社会における男女の性の在り方を比較しながら、ジェンダーレス社会のライフスタイルに活かせるよう工夫した。（家庭）

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	論理国語、政治経済、公共、日本史探究、世界史探究、保健、英語コミュニケーションⅡ、英語コミュニケーションⅢ、家庭基礎、国際理解

事業成果

知識的側面

「暴力に多くの種類があること」「月経前症候群の症状」「自身の性に対する考え方」など、性に関わる新しい知見を得ることができた。

価値的・態度的側面

「カップルだからといってなんでもしていいわけでなく、お互いを尊重することを大切にしていきたい」「人の嫌がることはしない」などの当たり前の行動規範や、男女ともに月経前症候群や月経痛の対策を知り、今後の生活に活かす方法を学んだ。また、自分の性が「ふつう」であるという思い込みを見直し、ジェンダーレス社会での向き合い方を意識させることができた。

技能的側面

何かあったときに「周りの人に相談したい」と思えるようになったとの意見が見られた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	滋賀県立能登川高等学校

人権課題	障害者	対象学年・取り扱った教科等	①２学年・公共 ②３学年・政治経済	時数等	①１　②１

目標・人権教育のねらい	①平等権の充実だけでは、解消できない現実社会での差別（障害者差別、部落差別、外国人差別など）の解消に向けた動きについて理解する。 ②障害者差別（障害者支援や雇用機会）について理解する。また、障害者に対する思いやりの心を持ち、親切にする意欲・態度を養う。
実施した内容	①差別解消に向けた法整備について学ぶ。 ②障害者に対しての支援や雇用機会について調べ、グループで共有し、理解を高める。また、グループ討議で自分たちにできることを考える。
工夫した点	①法整備が追い付いていない分野や、差別の解消が不十分な分野もあることに留意する。 ②・障害者と自分たちの比較から、違いや状況を理解できるようにした。 ・障害者に対する支援について、充実している面としていない面を理解させ、自分たちにできることを考えさせた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	政治経済、公共、英語コミュニケーションⅢ

事業成果	知識的側面 ①「すべての人が平等な扱いを受けなければならない」について、日本国憲法における平等とは何かについて、多くの生徒が理解した。 ②「障害者について理解する」について、約９割の生徒が理解した。 価値的・態度的側面 ①「法整備や制度が十分か考えることができる」について、法整備が追い付いていない分野や、差別の解消が不十分な分野もあることを考えることができる生徒が増えた。 ②「障害者差別改善の為に何ができるか考えることがある」について、約８割の生徒が肯定的に回答した。 技能的側面 ①「差別の解消に向けて、何が必要か考えることができる」について、障害者に対する配慮や何が差別的な取り扱いかを考えられる生徒が見られた。 ②「障害者の為に進んで動くことができる」について、約６割の生徒が可能だろうと返答した。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	滋賀県立能登川高等学校

人権課題	同和問題	対象学年・取り扱った教科等	①２学年・LHR ②３学年・LHR	時数等	①２　②１

目標・人権教育のねらい	①インターネットの登場で、同和問題に関する差別事象が増加傾向にある。このような時代において、部落についての正しい知識を養う。 ②就職や進学における面接の持つ意味を理解し、ふさわしくない質問を見抜き、毅然として対応する意識を身につける。
実施した内容	①実体験を基にした講演「昔の私、今の私、私を変えた結婚差別」を聞く。 ②面接の実演、班別討議を行い、不適正質問に気づく。
工夫した点	（指導上の工夫） ①・講師には、実体験を基に生徒目線での講演が可能な方を選定した。 ・講演前の事前アンケートで意識付けを行った。 ・アンケート結果を人権通信に掲載して配布した。 ②・不適正質問の実演前に、質問例を〇×形式で答えさせ、理由を考えさせた。 ・他者の価値観が共有できるよう班別討議の時間を設けた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	政治経済、日本史探究

事業成果

知識的側面
①事前アンケートで「部落差別が現在でもあると思う」は７５％で、昨年と同数だったが、「部落差別はなくなっていくものではなく、皆で伝え続けてなくしていくものだと知った」との感想が見られた。
②面接時に答える必要のない場合があることを初めて知る生徒が複数いた。

価値的・態度的側面
①事前アンケートで「同和問題のことはそっとしておけば自然になくなる」に対して、「そう思う・どちらかといえばそう思う」４１％、「そう思わない・どちらかといえばそう思わない」３３％だったが、講演後は「偏見や差別をなくすために自分の考えを変えてみようと思えた」など意識に変化の見られる意見があった。
②不適正質問に対して「不適切なことを言われた時に、言わない勇気を持ちたいと思った」との感想があった。

技能的側面
①事後アンケートで「自然消滅を待つのではなく、自分たちが一つ一つ消していこうと思った」と啓発活動に興味を示す生徒が見られた。
②模擬面接で不適正質問に対して、毅然と対応する生徒が見られた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	滋賀県立能登川高等学校

人権課題	外国人	対象学年・取り扱った教科等	①３学年・「国際理解」履修者 ②全学年・LHR	時数等	①１０ ②３

目標・人権教育のねらい	①国籍や民族などが異なることによる互いの文化的な違いを認め合い、グローバル社会における共生のための学習の機会とする。 ②国際化が進む現在、自分の生活が国際社会とどう関係しているか、自分にできることは何か、高等学校卒業後の人生設計を考える上で知るべきことを学ぶ。
実施した内容	①日本ラチーノ学院（ブラジル人学校）との１日交流を実施し、事前にポスター発表の準備を行った。 ②講演とワークショップ「世界がもし１００人の村だったら（１年）」、講演「日常にある『何気ない』差別に気付けるようになろう（２年）」、講演「世界と私の繋がり（３年）」を実施した。
工夫した点	（指導上の工夫） ①事前に滋賀県国際交流員ブラジル人講師による講演を行い、文化・慣習の違いについての理解を深めた。また、事前に日本文化紹介のポスターを作成した。 ②・講演場所を体育館とし、生徒のワークショップを企画した。（１年） ・日常に潜むマイクロアグレッションの可能性を考えさせた。（２年） ・自身が所有するものから世界を考えさせるよう企画した。（３年）

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	政治経済、世界史探究、日本史探究英語コミュニケーションⅡ、国際理解

事業成果

知識的側面

①英語での会話が不可能でも、ジェスチャーによるコミュニケーションが可能だとわかった。

②１年生は、国家間の格差と国内にある格差に共通点を見出し、２年生は、外国籍の人に対する無意識の言動の危うさに気付き、３年生は自分たちが知らない背景が多数あることを知り、入手する情報の正当性を常に検証しなければならないことを学んだ。

価値的・態度的側面

①日本ラチーノ学園の異年齢集団での生活を体験し、日本の学年制についての疑問を抱いた。また、言葉の壁があっても、相手のことを知りたいと思って接することで、円滑なコミュニケーションができることを経験した。

②世界情勢や国内の外国人を取り巻く困難に気付き、自分にできることを考えることができた。また、これまでの自分の言動を見直したり、さまざまな人に真実に気付いてもらえるよう行動していきたいなど、主体的に関与し行動しようという態度が見られた。

技能的側面

①異文化に対する抵抗が少なくなった。

②外国人との関係について、相手の立場を模擬的に経験して、自分の意識が変わるだけでもできることがあるなど、相違を超えて協力しようとする姿勢を習得した。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	滋賀県立能登川高等学校

人権課題	ハンセン病患者等	対象学年・取り扱った教科等	全学年 文化祭	時数等	ー

目標・人権教育のねらい	日本ではかつて、ハンセン病患者に対する国による徹底した人権侵害が行われたが、2019年から始まった新型コロナ感染病でも、感染者が差別される事象が発生した。今後も起こりかねない感染者に対する差別感情への問題意識を養う。
実施した内容	文化祭における図書館イベントの１つとして、ハンセン病関連資料を作成し掲示した。また、掲示内容の一部を、人権通信に掲載して全校生徒に配布した。
工夫した点	（指導上の工夫） ・コロナ禍での差別事象を比較のため取り上げた。 ・写真等を紹介し、目に留まる工夫をした。 ・当事者を１，２人に絞って紹介し、当事者意識が持てるよう考えた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	政治経済

事業成果	＜知識的側面＞ 　ハンセン病患者に対する差別事象は、全く知らないか、名前だけ知っている程度の知識の生徒が多い。知識として知ってもらうきっかけになった。 ＜価値的・態度的側面＞ 　コロナ感染者の差別事象と比較することで、現在でも起こり得ると感じることができた。 ＜技能的側面＞ 　新たな感染症が発生した場合、過去の過ちの１つとして認識する素地ができた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	滋賀県立能登川高等学校

人権課題	北朝鮮当局による拉致問題等	対象学年・取り扱った教科等	２学年・公共	時数等	１

目標・人権教育のねらい	拉致問題によって今も帰国が叶わない日本人がいることを知り、自分たちに何ができるか考える。

実施した内容	・拉致問題をどの程度認識できているか確認する。 ・拉致被害者家族の高齢化の現状を知り、問題の深刻さについて理解を深める。 ・日朝首脳会談などで解決に向けた努力が継続されていることを知る。 ・今の自分たちに何ができるのかを考える。（例：拉致問題に関心を持ち続ける）

工夫した点	（指導上の工夫） ・現在進行形での人権問題であるということを意識して指導する。 ・拉致被害者家族の高齢化に焦点を当て、時間的限りがある問題であることを意識させる。 ・拉致被害者全員の帰国は実現していないが、地道な努力が続けられていることを生徒に伝える。 ・政府認定拉致被害者だけではなく、特定失踪者についても併せて学習する。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	日本史探究

事業成果	知識的側面 「拉致問題がどのような問題か理解する」について、北朝鮮によって行われた、現在進行形の人権問題であるという認識を持つことを大半の生徒が共有できた。 価値的・態度的側面 「早期の解決がなぜ重要かを考えることができる」について、拉致被害者家族の高齢化という課題を意識できる生徒が増えた。 技能的側面 「拉致問題の解決に向けて、何が必要か考えることができる」について、関心を持ち続けることや拉致問題について積極的に取り組んでいる政治家を通じて国政に訴えるなど、具体的な行動を考えられる生徒が増えた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	滋賀県立能登川高等学校

人権課題	その他（平和学習）	対象学年・取り扱った教科等	全学年・LHR	時数等	２

目標・人権教育のねらい	戦後８０年となり、戦争を知る世代がこの世を去る中で、現在、世界各地で紛争が起きている。現在の緊迫した社会情勢の中で生きる生徒が、過去の大戦において日本が経験したことを知り、平和について知る機会とする。また、２学年は修学旅行先の長崎の事前学習とする。
実施した内容	講演「太平洋戦争と滋賀」を聞き、事後の感想を２年生学年通信および人権通信に掲載した。
工夫した点	（指導上の工夫） ・戦後８０年を意識し、身近に感じられる県内の講演を依頼した。 ・当時の映像、体験者の動画、寄せ書き等の資料を豊富に使っていただいた。 ・学年通信および人権通信で、生徒の感想を共有した。 ・２年生では、講演前に「戦争をなくすためできること」を考えさせた。

令和７年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	日本史探究

事業成果

知識的側面

　戦争の話は広島、長崎、沖縄だと思い込んできた生徒が複数あり、滋賀県内にも多数の犠牲者がいたことを学んだ。また、加害者側の話を初めて聞き、これまで知っていた内容はごく一部であることに気付くことができた。

価値的・態度的側面

　事前アンケートでは、戦争をなくすためにできることとして、「戦争の悲惨さを伝える」「日本の関わった戦争の歴史を授業やSNSで学ぶ」など過去のこととして捉える意見が多かったが、講演後は、「戦争は身近なものだということが分かりました」「今起きれば、自分も死ぬかもしれない」「僕には戦える勇気がない」など、我が事としてとらえる意見が増えた。

技能的側面

　事前アンケートでは「戦争についての授業をしっかり受ける」「平和の意識を高めるボランティア活動をする」など受け身的なものが大半であったが、事後は、「伝達できなくなっているから他の人へも伝えたい」「戦争を知らない人たちが増えていくので、受け継いでいかなければならない」など、自らの行動の変容につながる意見が多数を占めた。